

## 周南地方自然災害史（地震災害の部）

### 一 周南地方自然災害綜合年表の作成

會員 小林省三

#### はじめに

『徳山地方郷土史研究』第三二号で研究報告したように災害史に関する文献（書籍）は少なくないが、日本史全体の中で各種災害にわたって通覧できる史料はほとんどない。また、周南地方を対象とした災害のみを通覧できる史料も皆無ではなからうか。

そこで、本論では周南地方の自然災害について通覧できる史料（地震の部）の作成を試みた。自然災害は、自然作用が誘引となり、その原動力（破壊力）が、地域の人間社会生活環境における被害対象に絡み合つて、それに損傷や危害を加え、かつ、人命にかかわる現象、もし

くは人命にかかわる恐れのある現象である。本論では、地震災害の部について報告する。

#### 一 周南地方の地震災害

周南地方の地震発生についての確実な記録として最も古いものは、管見によれば寛永二年十二月四日（一六二五）の地震と考えられる。その後、昭和一六年四月六日（一九四一）までの三二六年間に約四〇回と推定される地震災害が記録されている。しかし、火山性地震災害の記録は皆無である。

日本は世界有数の地震国といわれ有史以来、地震によ

る被害は多かつた。

日本列島南岸にはマグニチュード八級の大地震を繰り返す東海・東南海・南海地震の想定震源域が連なる「南海トラフ(溝)」がある。また、日本列島は世界の火山の約七パーセントが存在する火山国でもある。

しかし、周南地方は気象庁震度階級関連解説表によれば、周南市はCランク今後三十年以内に震度六弱以上の地震の発生する確率は三パーセント以上十パーセント未満と京都右京区Bランク十パーセント以上二十パーセント未満などより地震発生の確率は低い。また、当地方には噴火警戒レベル導入火山は存在しないので火山性地震の発生する確率は極めて低い。

地震発生記録も京都と比較した場合、京都では桓武十九年(八〇〇年)から十年ごとに数えると八〇〇年代が七回・八一〇年代が六回発生と記録されている。

地震発生回数の記録は周南地方の記録より極めて多い。(註①)しかし、現在周南地方には東に岩国断層帯、西に防府沖海底断層があり、これらの地震による最大震

度は震度六強と想定され、南海トラフが今後三十年以内に起こる確立は五〇パーセントと予測されており、震度五弱から五強が想定されている。(註②)

## 二. 周南地方 災害年表(地震の部)

番号	年号	年月日	西暦年	記述	出典
1	天武	8. 12	679	筑紫国大地震、地割れ、山崩れ多し	災害史年表*
2	天武	13. 10. 14	684	諸国大地震、海嘯起筑紫地大震屋舎多壞	日本書紀、災害史年表
3	慶雲	4. 6. 23	707	諸国地大地震樹木僵	和漢合符
4	天平	16. 5. 12	744	肥後地震、山崩れ、水害激甚	災害史年表
5	元慶	4. 10. 14	880	出雲地震、社寺、家屋倒壊多し	災害史年表
6	仁和	3. 7. 8	887	諸国地大震(南海トラフ)	三代実録
7	元弘	1. 7. 10	1331	諸国地大震、紀伊千里浜突出二十余町	太平記、大日本史
8	永正	7. 8. 7	1510	諸国地大震、浜海水溢	本朝地震考
9	文祿	5. 7. 閏	1596	諸国地大震、畿内ことに甚だし	泰平年表、日本野史
10	寛永	2. 12. 13	1625	安芸大地震	岩国市史、災害史年表
11	寛永	4. 10. 4	1627	諸国地大震沿海海嘯起、人多死	本朝地震考
12	寛永	6. 2. 13	1629	大地震	岩国市史
13	慶安	9. 9. 13 4. 7. 18	1651	地震	岩国市史

文献最古の地震 元禄五年七月十四日(四一七年) 大和河内国の地震『日本書紀』

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
安水	明和	宝曆	宝曆	寛延	延享	享保	享保	享保	享保	享保	享保	正徳	宝永	宝永	宝永	貞享	延宝	延宝	寛文	寛文
7. 2. 5	6. 7. 28	12. 9. 2	1. 7. 15	1. 5. 23	4. 7. 20	18. 9. 11	12. 3. 19	11. 3. 20	6. 11. 13	5. 8. 4	3. 3. 20	1. 5. 25	6. 4. 22	4. 10. 28	3. 10. 4	2. 9. 10	5. 6	4. 6. 2	7. 2. 10	2. 9. 19
1 7 7 8	1 7 6 9	1 7 6 2	1 7 5 1	1 7 4 8	1 7 4 7	1 7 3 3	1 7 2 7	1 7 2 6	1 7 2 1	1 7 2 0	1 7 1 8	1 7 1 1	1 7 0 9	1 7 0 7	1 7 0 6	1 6 8 5	1 6 7 7	1 6 7 6	1 6 6 7	1 6 6 2
地震 の地、大震二月五日、六日地震	地震、日向灘、豊後地震	地震	地震	地震	廿日晚大地震	地震	地震	地震	地震	地震	地震	地震	地震	未刻大地震昼夜震(同月廿八日朝又震)(M8.9)(宝永大地震)(南海トラフ)	徳山地方に地震、高潮、山崩、崖崩あり	防長両国地震強く屋根瓦落つ、未刻大地震家中屋敷練堀、寺院石塔等崩壊(直下型地震)	日不詳、長門国山口地震強し	震い、家屋破る	地震	地震
続皇年代略記 草舎年表	岩国市史 災害史年表	岩国市史	岩国市史	岩国市史	草舎年表	岩国市史	岩国市史	岩国市史	岩国市史	岩国市史	岩国市史	岩国市史	岩国市史	徳山藩史	徳山略記	徳山藩史	大日本地震史料 毛利家年表	老人見聞私記	萩史料	岩国市史

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35					
安政	安政	嘉永	嘉永	弘化	天保	文化	寛政	寛政	寛政	天明					
3. 3. 20	3. 3. 2	2. 1. 18	11. 5 4	1. 2. 5	6. 2. 17	5. 10. 23	4. 11. 29	9. 9. 10	5. 2. 24	12. 2	7. 22	4. 3. 1	1. 4. 17	2. 10. 21	
1 8 5 5		1 8 5 4	1 8 5 3	1 8 5 2	1 8 4 7	1 8 4 1	1 8 1 2	1 7 9 3	1 7 9 2	1 7 8 9	1 7 8 2				
地震、並濟寺妙覚寺墓地、地制墓倒るもあり、数日微震	地震起こり、夜から昼翌朝まで九度揺れ、十九日も引き続き中位の地震起こる	地震起こり、夜から昼翌朝まで九度揺れ、十九日も引き続き中位の地震起こる	地震起こり、夜から昼翌朝まで九度揺れ、十九日も引き続き中位の地震起こる	地震起こり、夜から昼翌朝まで九度揺れ、十九日も引き続き中位の地震起こる	地震起こり、夜から昼翌朝まで九度揺れ、十九日も引き続き中位の地震起こる	地震起こり、夜から昼翌朝まで九度揺れ、十九日も引き続き中位の地震起こる	地震起こり、夜から昼翌朝まで九度揺れ、十九日も引き続き中位の地震起こる	地震起こり、夜から昼翌朝まで九度揺れ、十九日も引き続き中位の地震起こる	地震起こり、夜から昼翌朝まで九度揺れ、十九日も引き続き中位の地震起こる	地震起こり、夜から昼翌朝まで九度揺れ、十九日も引き続き中位の地震起こる	地震起こり、夜から昼翌朝まで九度揺れ、十九日も引き続き中位の地震起こる	地震起こり、夜から昼翌朝まで九度揺れ、十九日も引き続き中位の地震起こる	地震起こり、夜から昼翌朝まで九度揺れ、十九日も引き続き中位の地震起こる	地震起こり、夜から昼翌朝まで九度揺れ、十九日も引き続き中位の地震起こる	地震起こり、夜から昼翌朝まで九度揺れ、十九日も引き続き中位の地震起こる
岩国市史	岩国市史	岩国市史	岩国市史	岩国市史	岩国市史	岩国市史	岩国市史	岩国市史	岩国市史	岩国市史	岩国市史	岩国市史	岩国市史	岩国市史	

46	安政	4. 8. 5 9. 25. 5	1 8 5 7	強震、諸所被害 地震のため諸所損害 広島地震	岩国市史 算用所日記 近世生活史年表
47	安政	5. 12. 2	1 8 5 8	強震 広島地震類発	岩国市史 災害史年表
48	安政	6. 9. 11	1 8 5 9	強震 石見地大震損害実甚	岩国市史 近世生活史年表
49	明治	5. 2. 6	1 8 7 2	死者五三七(浜田地震) 阿武郡須佐付近を震央とする	浜田県庁書 災害史年表
50	明治	38. 6. 2	1 9 0 5	安芸灘地震(芸予地震)	災害史年表 気象要覽
51	昭和	16. 4. 6	1 9 4 1	地震あり、下関観測所発表 中震、下関、鹿野、萩、見島、 宇部、広瀬、堀、徳山、下松、 仙崎、吉部、平生など	

\*『日本史小百科 災害』 近藤出版社 掲載

### 三、江戸時代に記録された周南地方の地震史料

#### (1) 貞享大地震(直下型地震)

徳山藩史には

〔史料1〕

一貞享二年乙丑十二月十日未明大地震家中屋敷

練塀寺院石塔等崩損

と記録されており直下型の大地震の発生状況を知ることができらる。

なお、この貞享地震では安芸の地でも大いに震い家屋倒壊するもの多く死者も生じていて備後も地震強く長門及び伊予にも被害ありと『大日本地震史料』に記録されており、萩城内外石壁壊類するもの十二所、又萩市街家屋の頽倒する、大島郡地の家室辺又猛烈なりと『毛利十一代史』に記録されている。岩国でも地震、土塀壊れ瓦落つるもの多し、錦帯橋石台食み出すという記録がある。

#### (2) 宝永大地震(南海トラフ)

徳山藩史には

〔史料2〕

一宝永四年丁亥十月四日未刻大地震同夜高汐打

統昼夜震同月廿八日朝又震

と記録されており南海トラフによる海洋型大地震の発生状況を知ることができる。

なお、この宝永地震では、西国辺大地震となり柳井付近で強震、日積村のかはご石割れる。岩国大地震七日迄余震しきりという記録もある。

(3) 安政大地震(南海トラフ)

徳山藩史には

[史料3]

一安政元年十一月五日徳山大地震夕七半時頃暮

六半時夜四時前其余少々度々有之

と記録されており南海トラフによる海洋型大地震の発生  
状況を知ることができる。

また、諸郡よりの地震注進書によれば、末武下村庄屋

堀吉郎右衛門の次の様な記録がある。

[史料4]

覚

一西市御高札場 沓ヶ所

但、長三間横四尺九寸五歩

玉垣崩候事

一同所御米蔵 沓ヶ所

但、桁行拾貳間之内東

側壁五間張出後側

拾貳間之分少々割候事

一同所上村御蔵 沓ヶ所

但、上へ四間程壁落下り

候事

一糶御蔵 沓ヶ所

但、西角上之壁少々損候事

右昨五日地震にて損し候処

前書之通御座候、以上

末武下村庄屋

十一月六日

また、大庄屋堀三右衛門が御打廻茂平様に差し出した

次のような記録がある。

[史料5]

以飛札致啓達候、昨五日

申下刻へ移候頃、大地震にて諸人

色を替氣遣居申候処、酉上刻頃

相止候、諸村よりハ未為何儀

申出不仕候得共、都合大格別ハ

有御座間敷哉と奉存候、併

花岡八幡山石燈籠四本

倒式本ハ半倒、此外墓所

石塔も少々倒候様子ニ御座候

海辺ハ殊之外手強様子ニテ

西市御高札場其外大分

損所も有之趣委曲別紙

一ツ書を以申上仕候、徳山御領

下松東町ニはねりへい倒

しころ落土蔵等倒れ

酒場室実其外水物ハ

こぼれ出、豊井村ニテハ

長屋倒れ、妙法寺本堂

天火ニテ焼失仕候様子承り

誠ニ苦々敷事ニ御座候、酉

刻頃又地震仕候故花岡

村八幡宮ニ御祈禱執行

致せ申候、戌中刻より下刻迄

又々手強御座候、今晚

丑刻又手強有之無程

相止候、少々宛之儀ハ度々

有之候、只今卯刻ニ至

り候而ハ穩ニ相成申候、何卒

此後格別無之かしと

奉願候、昨日大地震ハ

下松より豊井之方手強

祝ケ縁当りハ手軽き浅江

野原室積等至テハ手強

怪我人も有之候風聞

承り申候処、林又右衛門より

未為何申出不仕ニ付、彼辺

様子未相分候、何分手強

趣ニハ相聞申候、末武下村

小浜地場少々割れ候

風聞御座候処、西市辺

昨日より今朝迄も外出

夜明し仕候位之事ニテ

何分委敷事ハ相分り

不申趣ニ御座候、西方

徳山辺当は手輕之

様子ニ御座候、諸村より

注進申出候ハ、御届可申上候間

此段被仰上可被下候、先ハ

為御注進如此ニ御座候

恐惶謹言

大庄屋

十一月六日

堀三右衛門

卯刻

尚々御算用方様へ別紙

差上不申候間、是又宜御取計

被成下候様奉願候、已上

御打廻

茂平様

周南地方の一地域である光市方面についても次のよう

な記録がある。

〔史料6〕

覚

一 御番所後ケ輪半倒

一 土蔵壱ケ所本倒

一 居屋式ケ所同断

一 同壱ケ所半倒

一 御高札場玉垣落損

右之外大垂損瓦壁

落損数ケ所

右室積浦

一 室積地方倒家有之

様相聞候へ共委敷儀

未相知不申候事

一 諸村之内強て之損処

無之趣ニ候へ共委敷儀ハ

未相知候事

右過ル五日夕七日七ツ

時より地震にて損処

荒増前書之通御座候、

以上

十一月 熊毛

芸州広島方面や岩国地方についても次のような記録がある。

〔史料7〕

安政元年

寅十一月十七日山代御代官より差出之

芸州廣嶋当月三日之夜四ツ

半時頃地震仕、翌四日朝五ツ時

過頃又々震り候て、夫より五日之夕方

七ツ半時頃殊之外之大地震ニテ

(中略)

御城内損シ所数ヶ所之様相聞

八丁堀と申所之御櫓壱ヶ所

崩し町内ハ所帯相応之者は

いつも船住居仕、裏屋貸家ニ

罷居候者は裏町え固屋懸ヶ

(中略)

岩国方も都合同様之由ニ相聞

候所廣嶋よりハ少々ハ和らかに

相聞候、五日之夕方ニハ

吉川様ニも御除地相成候由ニ

御座候、真光寺辺寺其外

門練壁崩レ候分有之由ニ御座候

町内はいつも河原え出、固屋

掛ヶ仕、致除家候由御座候

固屋懸入用之竹木ハ問屋

ニテ取候て代銀は追て

上より御払替可相成由ニ相聞候

町内はいつも蔀を入候得共

九日頃より追々店を明ヶ候者も

有之由ニ相聞候

右過ル三日より之大地震廣嶋

岩国方前書之通相聞候間

此段御注進申上候、以上



寅ノ 打廻り

十一月 山崎八郎次

おわりに

本論は『徳山地方郷土史研究』第三二号で研究報告した「周南地方自然災害史（気象の部）」の続編として補充するものである。両報告を併用して活用頂ければと思う。

本論からも判るように日本は世界有数の地震国といわれるが、幸いにも周南地方は有史以来大地震の記録は非常に少ない。

また、今後大地震発生の要因となると考えられるものも少ない。

但し、一七〇七年の宝永地震のように東海・東南海南海地震が同時に起きた場合、中央防災会議の想定によれば、マグニチュード八・七の超大地震となり山口県下の被害想定は、最大死者数約二〇〇人・最大全壊棟数四八〇〇棟・最大津波高は最大五メートルと報告されている。

また、過去の大地震災から得られた、教訓は「油断大敵」、「用意周到」、「自律連携」の三つに集約されると考えられる。

本論では、投稿規定の許容紙幅内で出来るだけ手持ちの史料を紹介した。これらの史料から具体的な地震状況の一端を知ることが出来る。

註

- ① 京都周辺地の地震活動の特性 尾崎和夫監修  
② 内閣府 被害想定（二〇二二年八月二十九日）『毎日新聞』

【参考文献】

- 小鹿島 果 『日本災異志』五月書房 一九八四年  
池田正一郎 『日本災變通志』新人物往來社 二〇〇四年  
渋谷 正勝 『山口県災異誌』山口県 一九五三年  
荒川 秀俊 『日本史小百科』災害  
宇佐美龍夫 近藤出版社 一九八三年  
金折 裕司 『山口県の活断層』近未來社 二〇〇五年  
伊藤 和明 『地震と噴火の日本史』岩波書店 二〇〇二年  
伊藤 和明 『日本の地震災害』岩波書店 二〇〇五年  
これらのほか、『山口県文化史年表』『徳山市史史料上』  
『岩國市史上』『柳井市史』『鹿野町誌』など